資料渉猟余話

その89

奥深い旧家の暮らし

嶋　不濁

伍和の千葉家で複写させていただいた写真を整理していると、16人の男女が生花を楽しんでいる様子を写した写真が見つかった。写真裏には「川路辻にて生花講習会記念」として、参加者であろう13人の名前が書かれている。写真向かって右上の女性2人とその横の老人の名前がないが、その横から今村正治、関島年穂、今村よね、今村もと（老母）。下段右から、恩澤澄雄、今村正郷（まさと）、下男銀治郎（今村）、今村つる、恩澤千種、今村正業、関島光治、恩澤亘（少年）である。川路の御三家と称された「辻」今村家と隣の「宮之前」関島家と「篁之内（やぶのうち）」今村家、その家から嫁出た娘たちの嫁ぎ先恩澤家、いわば近い親戚一同が子供たちも交え活花を楽しんでいる風景である。

旧家に残る古い写真を複写させていただきながら、篆刻額や篆書などを訪ね歩いていると、これらの遊びが、花道や茶道、俳諧などを嗜む人々の間で磨かれ、この谷の人々の暮らしや性向と結びついた一種独特な文化のように思えてくる。伊那谷の旧家にこうした土壌があったという証左にもなりそうな1枚である。

ところが、この写真。他にも、なにかひっかかるものがある。ここに名前があがった人々、どこかでまとめて目にした記憶がある。やっと思い出したのが、日夏耿之介が揮毫した生花遠州流流祖生伊藤一樹翁を調べていた時、その流祖松月斎伊藤一樹翁（原兎）の息伊藤一樹（一円）が「竹内有石翁のこと」（『伊那』昭和53年11月号）の中で、慶應3年から、有石が没する前年の大正6年までの竹内有石の門人を列記した部分である。ここには、門人が入門年次と共に住所や屋号などと共に記されている。

竹内有石については、「竹内有石翁のこと」に、竹内有石に触れた唯一の資料『伊那の俳人』（昭和2年）と、伊藤原兎「恩師略伝」（『松乃友』第一号序）の全文を載せているので、天保4年6月生まれ、大正7年11月24日享年88歳で逝った有石の略歴の詳細はそちらを参照されたいが、有石は、少年の頃、釈門に入り浄土宗の住職となって、主に長野県内を転住しながら、安政2年に挿花を、そして俳諧を、慶應2年には篆刻を会得し、明治16年4月に故郷久米の里に腰を据える。したがって門人は県内外に及ぶが、明治16年以降は喬木村・北方村・大瀬木村・中村・久米村・川路村・三穂村・下川路村・山本村・旦開村・会地村など飯田下伊那近村が俄然多くなる。久米や川路は、有石が生まれ、育った故郷であると、概略は知れるものの、どんな御仁か、その姿形は皆目見当がつかなかった。

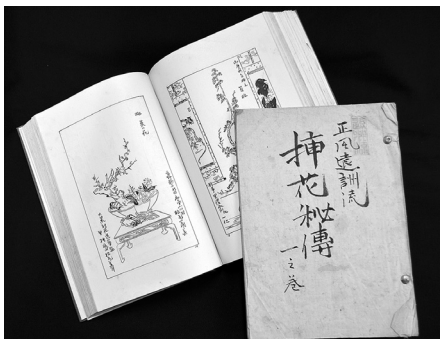
その門人帳の大正5年の項目には「今村銀次、今村くわ子、今村正郷、恩沢千種、宮之前光治、宮之前美那、下辻信男、田畑七十吉、田畑邦雄、田畑茂登子、田畑延子、大垣外」と門人の名前が並ぶ。宮之前や下辻は屋号で、今村姓である。したがって、先の写真は、辻の当主今村正治、篁之内の当主今村正郷、宮之前の当主関島光治らが揃って入門したのを記念して、辻で行われた遠州流生花の講習会で、時期も大正5年か6年頃のものであろう。してみると、名前のない右上の3人もだいたいあたりがついてくる。辻の当主今村正治と対座しているのが師匠である竹内有石その人と推定していいのではないだろうか？

江戸以前のことは知りようもないが、明治以降のことならば、かろうじて、その残滓（ざんし）が峡谷のあちらこちらに残されていることもわかった。篆刻額や篆書などを訪ね歩いていると、その折にたびたび耳にするのが竹内有石という名前であったが、その幻の肖像にようやく目鼻がついた。

明治末期の八幡郊処や大橋浩堂の来峡を契機に篆刻界は活気をみせ、萩元甸斉や篠田得斎、木下卓斎など尾林焼に新機軸をもたらし、大正期になると吉澤白城（宮澤秀俊）・山田虚六・今牧光山（桔平）らが峡風印社を結成し印譜『鳥跡』を出版、「伊那節」とタイアップするなど活況を呈する。そうした時代の背後で、谷の旧家は遠州流活花や茶道などが暮らしの中に息づいており、文化を守っていたのである。

その後、戦時中は奢侈として排除されたが、戦後再び、火で焼け残った太宰松や菊水の松の材に、歴史と文化を篆刻した。倉澤興世や鈴木不倒あたり、また宮島好堅の尽力もあって、花道や茶道、俳諧などを嗜む人たちの間で篆刻額や篆刻の施された天龍焼などが好まれ、川路・開善寺の建て替えの折の廃材や、園原・焼け折れた朝日松や帚木の銘木に刻した篆書・篆額が愛された。そうした人々の中で、昭和40年頃までは、この特殊な文化は磨かれ、識者らによって止揚されていたように思うが、こうしたこの峡谷の精神的にも豊かな暮らしは、経済最優先の合理化でマッチ箱のような家が林立するようになると、茶室や床の間が衰退したように、現代人の暮らしから消えていったようだ。

伍和の千葉家で見つかった写真



「辻」今村家からＭＳＣに寄贈された
遠州流挿花の秘伝書